

Diagnostic Support System (DSS) を用いた後方診療支援活動の運用と成果

座長 : 米田 登志男 (広島赤十字 原爆病院 検査部)

演者 : 佐々木 陽祐 (聖隷浜松病院 臨床検査部)

Diagnostic Support System (DSS) を用いた後方診療支援活動の運用と成果

◎佐々木 陽祐

聖隷浜松病院 臨床検査部

【背景】近年、医師の働き方改革の導入を受け、タスク・シフト/シェアの推進により、臨床検査技師としての業務が拡大しつつある。今までは多くの業務内容が検査室の中で完結していたが、メーカー努力による検査過程の自動化や測定機器・試薬の精度向上に伴い、今後はより「臨床」への参入が望まれる。

【取り組み】当院ではかねてより後方診療支援システムと称し、検査データを検査室で確認し、適宜、臨床側にメッセージを送るサービスを導入実施している。2014年より紙面ベースからDSS利用によるデータ解析にシフトした。設定したロジックを元に抽出されたデータを担当技師が解析し、医師へのコメント発信を行うことで診断や治療に繋げる取り組みである。データ解析が出来る人材は9名おり、DSS導入により臨床サービスのみならず人材育成・教育にも効果をあげている。

【実績】運用中のロジックは20種類以上あり、貧血や糖代謝異常、甲状腺機能異常などのデータが抽出でき、精度向上と効率化を図るため日々ロジックの改善にも取り組んでいる。1日60~70件(外来)の異常データが抽出され、2022年度では異常データ14,418件(外来のみ)を解析し、そのうち臨床へのメッセージ発信が必要となった件数は303件、メッセージ発信後に臨床から追加検査を依頼された件数は128件、対応率は42.2%であった。

【まとめ】DSSの取り組みにより私たち検査技師のデータ解析に関する知識向上に繋がっている。さらに、これらの解析により甲状腺機能低下症や副腎不全、巨赤芽球性貧血の診断に繋がった症例や、除外診断を促せた症例を経験することで、臨床への発信が患者へ還元されていることの実感が持て、検査技師の教育のみならず志気向上に大きく導けると感じた。

【展望】新機能としてデータ解析のロジックに、指定した薬剤処方の有無を入れ込むことが可能となり、化学療法時の副作用による処置中止メッセージの発信など、より多角的な運用が期待できる。今後の活動としてはロジックの解析精度を向上させ、外来患者のみに留まっていた解析を入院患者も含めて取り組むことでさらなる臨床への貢献を目指している。